

『意識の直接与件に関する試論』における持続と空間

河津邦喜

序

ベルクソンの最初の主著である『意識の直接与件に関する試論』（以下『試論』と略記する）は単に経験的・心理学的な問題領域の中を動いているに過ぎず、そのため様々な限界に捕らわれているという批判は、根強い。この批判によると、『試論』において未だ持続は、外的な物的世界・我々の身体や、意識の周縁部（そこにおいて意識は外界と接触し、それゆえ分割され固定化されている）からさえも区別される内的意識に過ぎないため、持続と空間との間の哲学的概念的区別は、内的意識と外的世界との間の素朴な前哲学的区別に依存し従属してしまっている。しかも内的意識とは、正確な学的分析を許さない領域であり、心理的内観という方法しか持たない『試論』の記述は、厳密な哲学的概念に達し得ない。サルトルに代表される現象学の批判によれば、『試論』は超越論的還元や形相的還元などの現象学的方法を持たないため、超越論的な場にまで高まり得ず、経験的意識を實在論的な仕方であつたために、意識の構造の核心をなす志向性や主体の脱目的運動に盲目的であり（内的自我と表面的自我との区別はその結果である）、経験的連合心理学から抜け出せていない。⁽¹⁾ また、バシユラールの批判によれば、『試論』において持続が心理的意識として実体化されており、その意識は行為との関連を離れてそれ自身の内で充足し、否定の契機を含まず、また、その連続性のみが強調され、真の時間

の非連続性が看過⁽²⁾されている。

確かに、ジャン・テオの言うように、『試論』は単なる経験的事実の曖昧な記述に終始してはいない。むしろそこには、既成の諸概念の哲学的・批判的分析が展開されている。⁽³⁾しかし、チャペックに代表される英米の研究者によると、『試論』の概念分析や科学批判は、素朴な心理的内観のみに裏づけを求めているという限界がある。⁽⁴⁾

1

『試論』を構成する、経験的心理的内観への依拠と、概念の哲学的分析という、二つの軸は密接に結合しているはずである。しかし、後者は非常に広大な射程を含み、その含意の展開は、ベルクソンにとって多大な時間を要した。それは『試論』では、ニュートン以来の物理学やゼノンのパラドックスへの批判として展開されたが、哲学全体に対する根本的批判としてのその意味が全面的に展開されたのは、十七年後の著作『創造的進化』第四章においてであった。だが実際は、ベルクソンは『試論』著作以前に既に、哲学全体への批判的意識を持っていた。『思想と動くもの』第三部の『緒論I』でベルクソン自身が回顧的に語り、また現在までの研究が確認しているように、『試論』以前にベルクソンは、クレルモン・フェランのブレイズ・パスカル校でスペンサー哲学の研究を通じて、スペンサーの進化論には進化の動きそのものが見落とされ、その体系に真の意味での時間が欠落していることを発見し、近代の自然科学のみならず既成の哲学体系への批判的意識に目覚め、その批判の一つの試みとして、心理学的な領域で問題提起しようという明確な自覚に基づいて『試論』を発表

したのであった。⁽⁵⁾ 実際『試論』には、『創造的進化』で全面的に展開される形而上学批判の先駆けとなる重要な論点が既に用意されている。知性の分析の働きの本質は、真の時間（すなわち運動・変化の核心である質的なもの）を抹消し、〈成りつつあること〉を〈既に成り終わったもの〉に還元しようとする傾向にあるという主張が、それである。例えば、知性は運動をその軌跡に還元する。そして、〈成り終わったもの〉は、その外にある一切のものから切り離してそれだけで考察することができ、その内でその諸部分は分離・結合・移動しても何等の変化も被らず、全体として何等の変化も生じないことが、前提されている。この前提によって、測定において部分の重ね合わせが有効性を持つのであり、近代科学は天文学から出発して原子論的な思考を推し進めたのである。⁽⁶⁾

『創造的進化』でもまた、古来形而上学は、生成を存在に還元しようとして様々な概念的操作を行うことで、真の実在である創造的な生成変化を隠蔽してきた、と言われている。しかしそれに留まらず、その操作には無数のヴァリエーションがありながら、それらに共通しているのは、「一切は既に与えられており、生成変化とは、それが小出しに現れることだ」とする根源的発想である、と主張される。⁽⁷⁾ 古代哲学においては、存在はアイデアの不変の体系のうちに一度にそっくり完足的 (complete) ・完全的 (partain) なものとして与えられており、時間はその墮落であり、継起する状態は、アイデアの影と、アイデアとの間に在る度の段階的増減を示す（アイデアをより鮮明に表す影の瞬間と、より不鮮明に表す影の瞬間がある）。近代哲学では、時間は単なる現象となり、状態の継起の背後には、その実在を成す関係の体系がある。⁽⁸⁾

知性の働きには、他から分離した或る不変の全体を想定する、全体化の操作が根源にある。ベルクソンの批

判する「回顧的錯覚」もその一つである。何故ならこの「錯覚」とは、〈新たに生成した事象に出会うと、事象を貧弱化したイメージを過去に投影しつつ、それをこの事象の可能的存在と見做すこと〉だが、それによって時間的な全体化がなされ、生成する事象は、可能態として既に与えられていたことになり、生成は存在に還元されてしまうからだ。⁽⁹⁾

しかしベルクソンは、知性の働きはその下図を日常生活における習慣的知覚・行動に負っている、と言う。この下図において、連続的変化として在る実在はシネマ的な操作によって不連続的な形態の継起に分割され、常に開かれてある実在は、他との交渉を欠き、部分の集合として在るような閉鎖系に還元される。これが空間化の働きであり、それによって隠蔽されるのは、連続的変化・開放系としての持続である。空間化は、知性の観念的操作に限られず、知覚の働きでもあるのだ。⁽¹⁰⁾

だが、それでは、『試論』において、形而上学批判へとつながる概念分析に対して、心理学的記述はどう貢献しているのだろうか。従来の研究者によれば、心理的意識に対する知的解釈が内観の証言に対して齟齬を来たすことの発見を通じて、知性一般の活動が空間化として批判されるに至る点で、貢献するのであった。しかし、このような貢献の仕方限定されるなら、心理的持続と、空間との関係は哲学的に総合されないままに留まることになる。実際、『試論』において空間とは知的表象に過ぎず、物質の実在性は曖昧なままに置かれており、体験されうる心理的実在と、知的表象の対立という二元論に留まっているという批判がよくなされる。⁽¹¹⁾

しかし、ベルクソンにおいて一般に、知性の活動への批判は、知的表象を退けて感性的な内的感情に訴えるという射程しか持たない訳ではない。むしろ対立は、知的なもの感性的なものとの間にではなく、知的表象

にせよ、感性的なものにせよ、表象の境位と持続のそれとの間にある。知性の抽象的表象に劣らず、静的形態としての知覚表象もまた、空間化の所産だからである。逆に、感性的持続に劣らず知的持続が存在する。既に『試論』において、我々が「或る種の問題について決心するときに示す非反省的な熱情が、我々の知性は知性の本能というものを備えていることを示している」のであり、この本能とは、「飛躍 (élan) すなわち諸観念の相互浸透」である、と言われている (p. 100)。この知的持続は、『試論』第三章で〈自由行為へと向かう自我の内での過去の生活の有機化〉として扱われる。これらが、『物質と記憶』の〈純粹記憶の現実化の運動〉へ繋がって行くのに対して、感性的表象を持続の空間化の所産と見做す視点は『物質と記憶』における〈知覚による世界の切斷〉、〈物的振動の圧縮〉という諸観念において初めて現れるように見えるかも知れない。しかし、〈我々は非常に長い時間の事象を一瞬の内に圧縮する〉という発想が、『試論』に見られる (pp. 145-149) ことに注目すべきである。

さて、『試論』における内観の役割と、二元論の問題について我々は、以下において次の様に考える。『試論』の内観は、心理的意識という実在的なものの場において、持続とその空間化がいかに実在的に構成されるかの分析を含むことで、概念分析に貢献している。そこでは心理的実在の三つの段階が区別されており、それによって持続と空間との単純な対立は存在しない事が説明される筈である。

2

『試論』のテーマは、その前書きで言われているように、あらゆる哲学的難問の内から自由の問題を取り出し、区別されるべきものの混同から自由を巡るアポリアが生じたことを証明することである。その第一章は心

理学的意識の強度を質と量との混同として、第二章は抽象的時間を持続と空間との混同として批判するが、この二つの章は自由の問題が扱われる「第三章への導入部として書かれた」(Ⅷ)。だが我々は、第三章での議論が第二章でのそれに基礎を置き、その延長線上にあるのを見る。何故なら、第三章において自由が「具体的自我とその自我の果たす行為との関係」(p. 163)と定義され、「自我を規定する無数の要因が、より有機化された形で行動へと現実化する程、我々は自由である」と言われる際(p. 126)、この主張は、諸要因を総合することで絶対的に特異な質を持つものを構成するような総合形式の存在を前提しているのであり、この総合形式は既に第二章において、意識の持続として、知性による再構成との対比でその存在が主張されているからである(この総合形式とはいかなるものかについては、後に検討することにする)。

この総合形式が働く自由行為においては、動機の決定力の量の等価性や(p. 128-129)、自我を規定する諸要因間の類似性によって(p. 139-142)行為を分析したり、行為同士を互いに比較したりすることは出来ない。等価性の原理も、類似性の原理も、知性がそこで働く『等質的環境』である空間においてのみ有効である。それに対して自由行為は、全体化できない諸要因の一回限りの組合せであって、互いに還元されない特異な質を持ち、未来へ向かっての過去と現在の総合である。

ベルクソンは、フェヒナーの精神物理学やミルの連合主義心理学が持続と空間とを混同している、と主張する。だが、『試論』第一章では質と量は全く無関係なもの、一方は心理的實在、他方は物的實在であって、両者の混合とは、単に、物的實在に対しては妥当な論理的操作が、誤って心理的實在に対して為されたことよって生じる偽りの観念に過ぎない。また、『試論』第三章では、自由行為についての既成の諸理論が自我、即ち心理的持続を、空間を通じて屈折した姿のみ捕らえ、その「物的記号」のみを扱っているに過ぎない、と主

張される。ここでも、心理的持続とその記号とは、實在とそれについての観念という大きな隔たりを持つ。その限りで『試論』は、持続が単に心理的なものでしかないだけでなく、物的實在との関係を切断されているようにみえる。

ところが、その混合を具体的に説明するに当たり、ベルクソンは心理的な意識内部の實在的因果過程として論じようとする。質と量との混合には二つのタイプが区別される。一つは「結果の或る種の質によって原因の大きさを値踏みするところにあり」(p. 52)、例えば重さの感覚の彼方にその原因としての大きさを表象し、この表象を重さの感覚に混入させてしまうというものだ。未だこのタイプは、實在的感覚に外から量についての観念的表象が付加されることでしかないように見える。それでも、この付加は意識内部での實在的過程として強調されている。特に、この第四節の筋肉努力についての分析は、努力の増大を努力作用に関係している身体部分の数の量と、それについての感覚に分析しながら、この二つの混合を因果関係として語っている。実際、このタイプの混合は『物質と記憶』では、知覚へ記憶を投射することによる対象の解釈作用として、再登場することになる。

第二のタイプすなわち、「基本的状態の内部に存在すると推測される単純な、心的事象の数の多少が強さと呼ばれる」(p. 53) 場合は、或る感情のコンプレックスが展開されて、苦しみと愛情とのはっきりと区別される二つの感情に分化されようとするような、實在の感情そのものが分化し量化される實在的因果過程が想定されている。この場合、ベルクソンが強度の観念を批判して強調するのは、この展開過程は「残りの点はすべて同一のままに留まりながら、或る欲望だけが次第に大きさを増していく」(p. 5) 事ではなく、強い意味での質的変化だという点である。この第二のタイプの意識の多様性をベルクソンは第一章末尾で「内的多様性」と呼び、

それを第二章で「純粹持続の中で展開される通りに」考察すると述べつつ (p. 54)、この問題は第一のタイプのそれよりも「はるかに重要だ」と言う (p. 55)。

さて、『試論』第二章は、第一章末尾にあるように、「質と量の混同が心理状態の系列そのものを侵し」(p. 55) ている場合を取り上げる。第二章によると、心理的意識は、空間と純粹持続との不純な混合物である。純粹持続とは、諸要素の相互浸透・絶対的異質性・内的有機化・連続的かつ質的变化である。ここでは持続と空間の混合同様、質と量の第二のタイプの混合同様、意識の持続という実在が分割・固定化されて、多かれ少なかれ「数的多様性」に変化してしまう事である。

この場合、空間はそれでもやはり持続に対して外からやってくるのだろうか。なるほど、第二章でも分割・固定化、即ち空間化は外から持続にやってくるかの如き言い方が見出されるばかりか、空間化を「記号による置き換え」と呼んで、あたかもそれが、持続に対して観念的表象を置き換えることであるかのように思わせる箇所がいくつもある (p. 67, 92, 96)。しかし我々は、『試論』において「(意識の) 強度」が第二章では真の実在として取り上げ直されるのを、見るのではないか (ベルクソンが「量の質がある」[p. 92] と言うときは特にそうである)。その過程で質と量の二元論も乗り越えられているのではないか。

我々は次に、この問題のはっきりした解決を『試論』第二章に見出すことにしよう。

3

第二章の第一節でベルクソンは、先ず、数を分析することで、数えるためには諸項が並置された空間的粹組みが必要であることを示す。次に単位 (unité) を直接に研究することで同じ結論に達する。一般に人々によつ

てその結論が見失われているのは、第一に数えるのは時間の中であるからであり (p. 58)、第二に数をその記号だけで考える習慣があるからであり (p. 58)、第三に数を構成する単位を考えると、それらを不可分な連続体として表象するからである (p. 60)。

(I) さて、数そのものについて、ベルクソンは、数が意識の中で示すいくつかの継起的相を区別する。第一に、数える過程において各単位が別々に把握され諸瞬間が分節されること、第二に、その過程で先行する瞬間は消え去るがその代わり空間的点を痕跡として残して置くこと、そして各痕跡間に距離が保たれること、第三に、これら痕跡点が数える過程の終わりに互いに結びあって一つの線になり、連続した線が全体で不可分なものとして捕らえられること、第四に、この連続した線が総和として対象化され、分割されること、である (pp. 56-59)。

(II) 次に、単位について、ユニテは全ての精神の行為の単純性と、その素材としての对象的表象の多様性とに、分析できるとベルクソンは言う。一つの単位はそれが構成単位としてみられている限り不可分だが、それら自身が構成単位から成る総和として見られる限り、分割されているものとして現れるという、二重の様相をとって現れるが、(I) の四つの相においてその二重の相が交互に現れる、と彼は考えている (pp. 59-63)。

ところで、ベルクソンはこの直後に、以上のことを認めるとしても、数えられる二つの仕方、つまり「はつきり区別される二種類の多様性がある」(p. 63) と言う。

(III) 既にその直前で言われていたように (pp. 62-63)、その一方は、初めから空間の内に諸項が位置づけられていて、それを総合しても分割しても何等その全体的様相が変化せず、「分割されていないものの内に下位的分割を単に潜在的でなく、現実的に知覚する」ことの出来るような物的対象の多様性である。他方は、

「複合的感情」のように、「より単純なかなりの多数の要素を含んで」おり、「それらの要素の総合の結果である心的状態」で、分割するとその全体的様相が変化してしまうものであり、分割されない内はその下位的分割は単に潜在的でしかない（「全面的に実現されたとはいえない」）多様性である。前者は「直接的に数を形成する」(p. 65) 数的多様性であり、後者は「可能態においてのみ、数を含む」(p. 66) 質的多様性である。

(IV) それに関してベルクソンは、我々にとり決定的に重要なことを述べる。即ち、遠くの鐘の継起的な音を聞くとき、先ず私は「それらの継起するその感覚の一つ一つを保持して他の感覚と共に組織化し、……音のグループを形成する。その場合には私は音を数えず、音の全体の数が私に与えた言わば質的な印象を取りまとめるに留まる」(p. 67) ということだ。ここでは、「音を数えない」とあるが、或る意味で無意識的に数えることと考えてよい。この数える事は、(I) における意識的に数えること（後者をAとし、前者をBとしよう）と、はっきり区別されている。

この数えることBは『試論』第二章第三節から九節にかけてますます重視されて行く。

Bは「先行する諸状態と現在の状態とを有機化する (organise)」ことであり、有機化された「それらの音の全体は、その身体各部に区別はありながら、お互いの結合の効果そのものによってそれらが浸透し合っている生き物になぞらえられるべきものであり」、従って質的多様性としての持続そのものである (p. 75)。ここで注意しなくてはならないが、外から来た時間・空間的に相互外在的な刺激の意識による総合によって構成された所産として、ベルクソンは意識の持続を考えているのである。この考えは、『試論』の第一・三章には見当たらない。第一章における感覺的質は互いに還元不可能なものとして、内的感情は相互浸透したものと、終始扱われており、第三章における行為の決定の際の「過去の生活の総合」も、やはり諸項の外在性の先在は

前提されていないからだ。そのため、我々は持続を常に既に与えられたものとして考え、持続は空間化されることはあってもその逆はないと考えがちである。しかし、その解釈は、物的世界を意識の空間的表象に還元するか、物的世界（Ⅱ空間）と意識（Ⅱ持続）との単なる二元論に『試論』を留めることになるだろう。これとは逆に、我々は第二章の前記のベルクソンの考えを決定的なものとみなし、他の二章もその観点から考察し直すべきだと考える。

それでは、数えることAとBとはどういう関係にあり、畢竟、空間と持続はどういう関係にあるか。

(V) ベルクソンはこの問いにはっきり答えている。『試論』第二章第八節で彼は、数的多様性を「区別ある多様性」と呼び、意識の諸状態の多様性を「質的多様性」と呼んで両者を対比させつつも、「しかもやはり我々は、区別ある多様性の観念を形成するのにも、質的多数性と呼んだものを並行的に考えること無しにはすまないのである。」諸単位を空間内に配列することによってあからさまにそれを数えているとき、同一の諸項が等質の地の上に描き出されていくこの加え算と並んで、心の深いところでは、鉄床に感じがあったら槌の打撃数の増加について持つだろうと思われる純粋に質的な表象によく似たきわめてダイナミックな過程である、これらの諸項の有機化が行われる」と述べ(p. 52)、これらを「我々が諸単位を数えて区別ある多様性を形成する過程」が示す「二重の様相」だと言う(p. 53)。「傍点論者」。つまり、数えることAは、Bの基礎の上にて初めて成り立つのである。

ここでもう一度、第二章第一節の数の分析に立ち戻ってみよう。(I)と(II)とから、(V)までの間に何が生じただろうか。先ず、我々は(I)での意識の時間的構造の分析が、(V)までの間に大きく変更されていることに気付く。次に(V)で言われる二重の相とは、(II)で言われる単位が示す二つの相とは全く重なる

らないことに気付く。何故なら、(II)の二つの相とは、構成単位の同一性と、それらの総和の全体的同一性であるが、両者とも空間的表象が示す側面に過ぎず、(V)で言われる心の浅いところで為される過程に属するからだ。結局(I)と(II)とは、数的多様性と数えることAとの境位に留まるのに対し、(V)は、(III)と(IV)とで二種の多様性が区別されたのを受けて、数える意識のより複雑な構造に達したのだ。しかしそれでは(I)と(II)の分析はいかなる意義を持つのか。そもそも数には、時間あるいは意識の総合と、空間性が二つながら含まれていることを示すことで、逆に両者を区別することに、(I)と(II)の分析の目的があった。我々はこの時間||意識の総合の根源的形式が(III)以降、持続||有機化(organisation)として把握されたのだと考えることが出来る。

ベルクソンは、数えることAの、Bによる基礎付けが如何にしてなされるかを、実は第二章第一節ではっきり記述している。(IV)の冒頭で示したように、私は音を数えようと思わずにそれらを組織化するが、「また、私はそれらの感覚を数えようという気持ちをはっきり持つ場合がある。その場合には私はそれらの感覚をどうしても分離せねばならないだろうし、またこのような分離はある等質の環境のなかで行われねばならず、そこでは各音は、その質を奪われて、いわば空虚にされ、それが通過した、同一の痕跡を残すことになるだろう」(p. 64-65)。つまり、数えられた瞬間が意識の痕跡を残すのは、先ず数えることBによって諸感覚を意識が有機化し、持続の質的多様性を構成した後、相互浸透した諸感覚をAによって分割し、並置することによってである。各構成単位から、それらの総和の全体的表象を構成するには、諸項の有機化と、分割という二重の操作が必要であり、諸項の並置は、それらの有機化以前には可能でない、と考える事が出来る。(I)と(II)における各相の区別はこの有機化に関わるのだ。そして、数えることAとBとの区別に対応して、ベルクソン

は意識の二種類の総合を区別していると言えよう。Bに対応するのは持続を構成する「有機化」であり、それは無意思的になされるが故に受動的総合である。Aに対応するのは、受動的総合に基づいて遂行され、持続を分解し諸項を並置して空間的表象を作るものであり、主体が意思的になす能動的総合である。ドゥルーズによると、『試論』における受動的総合は、「生ける現在」を構成する時間の根源的総合であり、直接的過去の把持と直接的未来の予料とを含む。また、主体そのものを構成する点で前主体的であり、過去から未来への移行そのものである点で非対称的であり、未だ対象の表象を構成しない点で前表象的である。それに対して、能動的総合は、受動的総合を土台として、結合された刺激を一種の「補助的空間」の内に再構成し、それによって対象の表象を構成する。また、それが含むのは表象の反省的過去と予見の反省的未来である。⁽¹²⁾

さてベルクソンは、第一章の、意識の表層の感覚と、深層の感情との区別を受けて、第二章でも、数えることは意識が外界と接触する表層に位置すると考えている。その特権的な例として彼が挙げるのは、運動の知覚である。それは、この知覚は運動体の各時点での位置の記憶を、現在の感覚と共に総合することで成り立つが、この持続は容易に空間内へ軌跡という形で投影されてしまうからだ (p. 92-93)。だが、このことはあらゆる表面的感覚についていえるとベルクソンは述べる (p. 93)。「一言でいえば、我々の自我はその表面では外部世界に触れているものなのだ。それで継起する諸感覚は、お互いの内部へと溶け合っているとはいえ、その原因の客観的特徴となっている相互外在性のいくらかを留めている。これこそ、表層的な心理生活が等質的な環境の中で繰り広げられて、しかもこのような表象の仕方にはたいした努力を必要としないことの理由である」 (p. 93)。

我々は今や、『試論』第二章のここまでの読解から、空間性の三つの段階を区別しなくてはならなくなる。

第一に、意識に外からやってくる物的刺激即ち物質の相互外在性Xであり、第二に、この刺激を意識が己れの内で有機化することで相互浸透させながらも「いくら留めている」相互外在性Yであり、第三に、意識の有機化によって構成された持続 \parallel 質的多様性を分割し並置することで成立する空間的表象の相互外在性Zである。XとZとは区別されなくてはならない。Xは絶えず生じては消える物的な流れであり、『物質と記憶』において物質としてのイマージュ \parallel 振動と捕らえ直されるものであるのに対し、Zは意識における安定した静的表象であるからだ。問題となるのはYだが、これは、持続を分割する可能性の根拠として考えられている以上、ベルクソンが持続の質的多様性を含むと言う「可能態における数 (le nombre……en puissance)」(p. 90)の事だと言えよう。持続は空間性Xを言わば潜在化するのである。

『試論』第二章第二節の pp. 71-72 においてベルクソンは、「拡がり (étendue) の知覚と空間 (espace) の概念」とを区別し、動物は方角によって質を異にするいわゆる方位空間すなわち「拡がり」の世界に住んでいることを指摘し、「実を言えば、質的差異は自然の至る所にある」、従ってむしろ「我々人間が質を欠いた空間を知覚し、あるいは理解する特別の能力を持っているのだと言うべきである」、と述べているが、我々の区別との関連では、「拡がり」と「空間」をそれぞれ、空間性Y、Zに対応させねばならない。ベルクソンにおいて方位空間は決して絶対的所与ではなく、生物身体の知覚—運動系の機能が空間性Xから出発して構成する世界であるからだ。⁽¹³⁾

実在のこの三つのレヴェルの区別は非常に重要である。ベルクソンは『試論』以後この区別をあらゆる領域で操作したからだ。それは『物質と記憶』では、物質としてのイマージュ・我々の意識において収縮されたイマージュ・その表層に生じる静的な知覚表象、の区別、『創造的進化』では、宇宙の物質流・生命の有機的身

体の活動・有機体の外的形態、の区別となって現れている。⁽¹⁴⁾ これらの系列において第二項こそ持続であり、第三項は持続を基礎に生じながら持続を覆い隠す空間的形態である。しかも、この形態は単なる知性の抽象的表象ではなく、実在的なものであり、持続の空間化は実在そのものの働きなのである。

空間化を実在的なものと見るこのような考え方は、『試論』の内観から生まれたが、それは、概念分析が知的な抽象的観念のみに関わるのに対して、内観が空間化の働きを実在的・感性的な知覚の内に見出した為である。しかも、概念分析は、知性による分割・再構成が実在の対象に対して必然的に歪んだ像を与えることを、批判することに関わるが、それに対して内観は、既に与えられている実在なり真理なりをいかに正しく認識するかという観点を超えて、実在の只中で、持続や表象という新しい実在がいかに産出され創造されるかという発生論的観点に立つ。そして後者の観点こそ、ベルクソン哲学の原動力となったものである。

結局、『試論』において内観は、持続と空間との単純な二元論からベルクソンを抜け出させているのであり、『試論』において既に持続は空間性を含むのである。

本文中のページ数は全つゝ“Essai sur les données immédiates de la conscience”, 1889, P.U.F.からのものである。

- (1) J.P.Sartre, "Imagination" P.U.F., pp. 41-70
 - (2) G.Bachelard, "L'Intuition de l'Instant" Gonthier
 - (3) Jean Theau "La critique bergsonienne du concept" P.U.F., p.37
 - (4) M.Capek, "Bergson and modern physics" D.Reidel
 - (5) Barthelemy-Madaule, "Bergson" Seuil, p.42
 - (6) 『試論』第一章第十一節、第二章第六・七節、第三章第一節参照
 - (7) "L'Evolution creatrice", 1907, P.U.F., p.344 p.353
 - (8) *ibid.*, chap. 4, §3~§11
 - (9) "La pensée et le mouvant", 1969, P.U.F., p.115
 - (10) "La pensée et le mouvant", pp.111-113
 - (11) "L'Evolution creatrice", 1907, P.U.F., pp.300-303
 - (12) Jean Hyppolite, "Figures de la pensée philosophique" vol.1, P.U.F., p.472
 - (13) G.Deleuze, "Différence et Répétition" P.U.F., pp.96-115, 特^ニ p.98参照
 - (14) 『物質と記憶』第一章は、生きられる延長世界を身体が、空間性X(物的イデーシヤの世界)から出発してどのように構成していくか分析してゐる。また、G.Deleuze, "L'Image-mouvement" Minuit, pp.85-97参照
- 有機体の外的形態とは、ヘルクソンが有機体の「物質面 (materialité)」と呼ぶものであり、空間的に我々に現れてくるものである。(“L'Evolution creatrice” 1907, P.U.F., p.94)